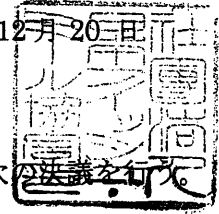


平成 16 年 12 月 20 日

## 社団法人 日本フィッシュミール協会全国集会決議事項



我々協会員は、今回の農林水産省による三種混合ミールの製造認可に断固反対し、次の決議を行う。

### 1. 「分別管理という基本」を崩すような安全政策の転換は認められない

BSE 発生以来、動物蛋白原料については、安全評価を得た品目ごとに厳しいリスク管理措置を制定し、この遵守を前提に大臣確認を与える制度により、安全が保証されてきた。我々もこの制度の下に信頼獲得に努め、世界で最も安全な魚粉を飼料業界に供給し、その社会的使命を全うしてきたと自負しているものである。

しかるに今回認可されようとしている三種混合ミールは、鶏・豚・魚を生原料段階で混合し製造するもので、単品ごとの分別管理という、これまでのリスク管理の基本を根底から覆すものである。我々は、このリスク管理の基本によって安全信頼性を確保できており、この基本に逆行する三種混合ミールの認可は、断じて許すわけにはいかない。

### 2. リスク管理措置を制定しても三種混合ミールの安全は担保できない

三種混合ミールは、製品を検査しても、個々の生原料が分別収集できているかどうか検証できず、生原料を検査しても正確な結果は得られない。検査という現実的な検証手段がなければ、単品ごとに、いくら厳しいリスク管理措置を制定しても、守らせるべき動機付けが弱く、形骸化する懸念が大きい。

またリスク管理措置の重要な要件の一つとして、トレーサビリティ体制が義務付けられているが、仮に三種混合ミールから反芻動物由来の蛋白質が検出された場合、その発生元をトレースするのは困難を極め、問題解決には多大の時間と労力が費やされる。これでは迅速を旨とするトレーサビリティの機能が果たせないものとなる。このように生原料段階での混合では、折角のリスク管理措置が期待通りに働かないため、製品の安全は担保できないと考えるものである。

### 3. 水産資源リサイクルを守れ

わが業界は、水産リサイクル体制を確立しており、レンダラーの畜産リサイクルとは住み分けができていた。三種混合ミールが認可されると、この境界が取り払われ、両リサイクルシステムに無用の混乱を引き起こすばかりでなく、地域によっては、リサイクル自体を崩壊させてしまう懸念もある。またリサイクルは、安全性が確保されて始めて成り立つものであり、この面からも三種混合ミールについては、上述のような不安があるだけに、認可には反対である。

### 4. 我々魚粉・魚油業界としての決意を示そう

三種混合ミールが認可され、生産が開始されたとしても、その飼料原料としての商品性は、飼料安全法に耐えうるものかどうか甚だ疑問な点が多い。

BSE 発生以来、莫大な人、金、時間をかけ、やっと安全が保証できる仕組みが定着してきた時だけに、我々は今こそ全力を挙げて、より安全・良質な魚粉生産に邁進し、生原料集荷先および魚粉販売先の信頼性を一層高めていく決意を内外に示そうではないか。これこそ、三種混合ミール問題だけでなく、どんな逆境にも耐えうる経営基盤を確保し、水産リサイクル体制を強化する王道であることを確信するものである。

以上